

## ターラナータ著『般若心経頌註』について

現銀谷 史 明

はじめに

ターラナータ (Tāranātha, 1575-1634) の著した『般若心経頌註』は、ターラナータ 29 歳のときの作である。頌註とは註釈が偈頌の形式で書かれているためのタイトルである<sup>1</sup>。正式には『般若心経難積無比王』(以下『無比王』)といい、般若心経に対して二種類の註釈内容を有している。彼はこの二種を前半と後半に分け、前半を般若経の「顕説」である空思想をもって解釈し、後半を般若経の所謂「隠義」である現観莊嚴論の八事 (dngos brgyad) を適用して、解釈を行っている。そして、後半の八事による解釈に彼はその独自性と重要性があると自負する。

この註釈にはターラナータの他の 2 種の般若心経註のように木版本が入手できない。使用テキストは 2004 年に西藏人民出版社から発刊された『般若波羅蜜多心経詞解』(以下『詞解』)である。この本の後書きにテキストについての言及が見られるが、そこではこのターラナータの造った 3 種の般若心経註は、デブン寺とドメのザムタン大学堂図書館所蔵の写本にもとづき印刷したとあり<sup>2</sup>、それ以上の情報はない。したがってこのテキストを別の版本と校合することは不可能であり、以下に試みた翻訳にしても暫定的なものではない。

### 『無比王』の構成

『無比王』は全 90 偈からなる。第 1 偈から第 87 偈までは 7 音節 × 4 行を 1 偈とし、第 88 偈から第 90 偈までは 9 音節 × 4 行となっている。この偈の中に科文も織り込まれている。第 1 偈～第 2 偈は帰敬序、第 3 偈は発起序である。第 4 偈～第 6 偈は註釈本文に入るための導入部であり、第 7 偈から註釈本文に入る。註釈本文は、概論と本論に分かれ、概論は「〔般若経に〕共通の内容」と「〔般若心経〕独自の内容」から成る。「〔経に〕共通の内容」はさらに「般若波羅蜜の本体」と「実践としての修習の心得」と「進むべき道程」の三つに分けられる。「般若波羅蜜の本体」は第 7 偈の 4 行目から第 9 偈の 1 行目まで、「実践としての修習の心得」は第 9 偈の 2 行目から第 10 偈の 1 行目まで、「進むべき道程」は第 10 偈の 2 行目から第 11 偈の 1 行目までで説明される。第 11 偈の 2 行目から「〔般若

心経] 独自の内容」が説かれる。これが(テキストには指示されていないが)第19偈の2行目までに説明される。この偈の3行目から「本論」が始まり、本論は経文に沿った解釈である顕説(dngos bstan)註と経文に暗示された解釈である隠義(spas don)註から成る。顕説註は第9偈の3行目から第27偈まで、隠義註は第28偈から第84偈までに解説される。第85偈～第90偈までは註釈の結びに当てられる。

以上の構成から、分量的に見てもターラナータの主張の主たるものは隠義註、すなわち般若心経を現観莊嚴論に従い解釈することに置かれている。具体的に言えば、現観莊嚴論の論述内容(brjod pa'i don)たる八事(dngos brgyad)を般若心経に配当した解釈である。この解釈をターラナータは「善説」「前代未聞の善説」と言い、古の賢者たる知者たちもこのようなアイデアを持っていたが、文字にした者はいなかったと述べている<sup>3</sup>。

### 「前代未聞の善説」構想

「前代未聞の善説」というターラナータの考えは後に『前代未聞の善説』と名付ける註釈書に結実する。『前代未聞の善説』では「十の善説」を数えているが<sup>4</sup>、その中の第六には「[般若心] 経の語句を八つのパートに分けて、[それを] 八事の説明に結び付けているのは[般若心経では] まったく明らかなことであり、この組み合わせが第六[の善説]である」とあり、第九では「顕説と隠義の両者を説明している中、共通するものは一緒に説明しているし、共通していないものは顕説と隠義を混ぜていないし、顕説と隠義を抽出して区別して説明していることも「前代未聞の善説」としての第九である」と述べており、『無比王』での八事による解釈、及び顕説と隠義の両者による解釈が『前代未聞の善説』に組み込まれていることが知られる。

また、彼には『語釈』という註釈書があり、この書は『無比王』では言及されていない他空説による般若心経の註釈である。『語釈』では般若心経を五つのポイントを挙げ、他空説解釈を施しているが、この解釈も『前代未聞の善説』ではその第十に「[般若心経本文前の] 導入」の箇所でも五蘊を空として修習することを般若波羅蜜に入る方便として説明しているので、実際の般若波羅蜜と単空とは別であると説明していること、「空性は色である」等と、「[無] 減・無増」という語句と、空性を被限定基体(khyad gzhi)と見なして、有為によって中観の究極である他空大中観の意味を明確に説明していることが「[前代未聞の善説]の] 第十[の善説である]」と述べ、他空説解釈も「前代未聞の善説」として組み入れられている。『語釈』と『前代未聞の善説』との先後関係ははっきりしたことは分からないが<sup>5</sup>、いずれにせよ、「前代未聞の善説」の一つとして構想されているのである。

略号・使用テキスト：

D: チベット大蔵経デルゲ版

H: チベット大蔵経ラサ版

MSA: Mahāyāna-Sūtrālamkāra, Lévi, Sylvain ed., Paris, 1907

MSAk(D): Theg pa chen po mdo sde'i rgyan zhes bya ba'i tshig le'ur byas pa, (D4020, sems tsam, phi 1b1-39a4)

『善勇猛所問経』: 'Phags pa rab kyi rtsal gyis nram par gnong pas zhus pa zhes rab kyi pha rol tu phyin pa bstan pa (H.vol.34, no.14, sna tshogs, ka1b1-123b1)

『一字母』: De bzhin gshegs pa thams cad kyi yum shes rab kyi pha rol tu phyin ma yi ge gcig ma (H. vol.34, no.22, sna tshogs, ka252b2-253a1)

『詞解』: *Sher snying gi 'grel pa sngon med legs bshad*, lHa sa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2004.

『無比王』: Tāranātha, *'Phags ma shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i dka' 'grel 'gran zla med pa'i rgyal po tshig le'ur byes pa*, in *Sher snying gi 'grel pa sngon med legs bshad*, lHa sa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2004.

『語釈』: -----, *Sher snying gi tshig 'grel*, in *Sher snying gi 'grel pa sngon med legs bshad*, lHa sa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2004.

『前代未聞の善説』 -----, *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i mdo nram par bshad pa sngon med legs bshad*, lHa sa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2004.

『集成』: 渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心経註釈集成〈インド・チベット編〉』起心書房、2016

現銀谷 [2010]: 現銀谷史明「ターラナータの般若心経註について」『佛教學』第52号、pp.113-133

野澤 [1957]: 野澤静證『大乘佛教瑜伽行の研究』法藏館

服部 [1961]: 服部正明「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』9, 1961, pp.119-136

真野 [1972]: 真野龍海『現観莊嚴論の研究』山喜房佛書林

#### 本文註

1. 原語は *'phags ma shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i snying po'i 'grel pa tshig le'ur byes pa* である。
2. 『詞解』 p.189
3. 第85偈『詞解』 p.11
4. 「十の善説」については現銀谷 [2010] pp.118-119 参照。
5. 『語釈』と『前代未聞の善説』との先後関係については、『語釈』は『前代未聞の善説』より後に書かれたのではないかと推測される(現銀谷 [2010] pp.123-125)。

## 試 訳

凡例：

〈〉：チベット語テキストに記されている補足語句

〔〕：訳者による補足

( )：訳者による語句説明或いは言い換え

タイトル：「聖仏母般若心経の難解箇所の註釈 - 無比王頌」

仏陀に帰依します。聖仏母般若心経註たる頌  
師 (bla ma) と仏陀ならびに菩薩すべてに帰依します。

私の知性を明瞭にして下さった  
最上の師に謹んで敬礼致します。  
勝者たる無敵守護者 (弥勒菩薩) にも  
繰り返し帰依致します。(1)

般若波羅蜜の在り方たる  
無二の智慧の本体  
それに無二の仕方  
あらゆる事 (= 八事) に帰依し、敬礼します。(2)

一切諸仏を生じさせる母が  
般若波羅蜜母である。  
その心髄をまとめたものたる  
二十五 [偈]<sup>1</sup>を私が説明しよう。(3)

殆どのアーチャーラヤは 〈十万頌から撰頌までを除き〉<sup>2</sup> この経等は  
八事<sup>3</sup>を説明しないので  
般若波羅蜜を主体とする経ではなく、  
般若波羅蜜経の支分である。(4)

三解脱門などを教師が  
〈般若波羅蜜の〉心髄をまとめただけだとお説きになっている。  
般若波羅蜜の在り方に  
勝解する善い機会に会って (5)

この内容を心に習熟することにより、  
どの様にしても得難い  
八事たる道次第、これを見出せるものが  
勝者および菩薩達の力である。(6)

これには、〈概論と本論との二つ [がある]。初めのものには、[般若経に] 共通 [の  
内容] と [般若心経] 独自 [の内容] との二つ。初めの [般若経に] 共通 [の内容]  
には〉般若波羅蜜の本体と  
実践としての修習の心得と

進むべき道程である。

初めのもの (= 般若波羅蜜の本体) は、ディグナーガの (7)

『八千〔頌般若経〕要頌』のように捉えるべきである<sup>4</sup>。

般若波羅蜜は無二の

智慧〔であり、〕それが如来という

成就すべき目的と実際に結び付ける〔ところの〕(8)

教えと道に対してその〔般若という〕言葉〔が使われる〕。

第二〈修習の心得に見解、修習、行為、果の四つがある中〉見解は、二無我

修習は止・観の二つ

行為は六波羅蜜など (9)

果は三身・五智である。

第三〈進むべき道程〉は、五道・十地と

三十七菩提分〔であって、〕

これらは非常に広大なものである。(10)

〔以上の事柄は〕無敵守護者 (= 弥勒菩薩) の典籍に従って見なさい<sup>5</sup>。

それでは、〈般若心経〉独自の内容を説明する<sup>6</sup>。

この経はいつ説かれたのか、そして

究極の意図はどこに存するのか? (11)

実際に説いた人は誰なのか?

この〔経の〕目的などの四法とは何か<sup>7</sup>?

人間界 (mi'i yul) でどのように広まったのか?

これらが経の説明に (12)

入るに当たって適用されるべきである。

〔般若心経が説かれた〕「時」は廣大般若波羅蜜経 (= 十万頌般若経) 以前である。

『解深密経』等において

勝者自身が説明なさっているからである。さらに (13)

〈最後〔の第三転〕法輪だけでなく〉般若波羅蜜自体の経蔵の中にも

「弥勒所問章」<sup>8</sup>で三性を

お説きになっているので、意図の究極は

〔唯〕識及び中観と別ではない。(14)

〔しかし〕暫定的には所化 (= 教化対象者) に応じて

無自性論 (= 中観) として説くこともある。

この〔般若心経の〕語句の意味のほとんどは

弁舌に巧みな者たちによっては理解しやすく、(15)

インド・チベットの古の知者達

すべてが繰り返して説明しているので、

隠義 (sbas don) たるこの現観の次第を

知ったならば、語句の意味を古の (16)

解説と一致させて説明して〔聴き手の心に〕注ぎ入れなさい。  
説教者には三つの教え<sup>9</sup>が揃っている。  
説教内容の顕説 (dngos bstan) たる五道と  
三性を繰り返して説示し、(17)

隠義たる八現観すべてを説明している。  
目的等是他〔の経〕と同じである。  
〔般若心経は〕廣大般若経 (yum gyi mdo sde rgyas pa) より  
以前に人間界にもたらされた。(18)

この地方では (phyogs 'dir) ヴィマラミトラが  
翻訳し、解説を広汎になさった。  
顕説の語句の要約内容は  
「このように私は聞いた」等によって (19)

導入たる五門満<sup>10</sup>が示されている。  
「その時世尊は」等によって  
甚深なる経の由来を通した  
この甚深なる般若波羅蜜の (20)

受持、説明及び修習の全てが  
勝者の力のみによって説示されている<sup>11</sup>。  
すなわち、舍利弗が所知 (shes bya) 等〔を知る〕  
般若波羅蜜の在り方を (21)

〔どのように〕行じるべき〔かを問う〕一連の質問〔とそれに対する回答〕である。  
「五蘊は空」等によって  
空性 (空解脱門) が明確に説示されている。  
「垢〔が無く〕離垢〔も〕無い」等によって (22)

染汚と清浄の縁起が否定されているので、  
無相解脱〔門が示され〕、  
「滅〔無く〕増〔も〕無い」という句によって  
結果が否定されているので、無願〔解脱門〕が示される。(23)

そのように、若干略説された〔経文を〕  
詳説しているのが「色は無い」等である。  
すなわち「色が無い」等によって空性 (= 空解脱門) が示される  
「無明が無い」等によって無相〔解脱門〕 (24)

「苦が無い」等によって無願〔解脱門〕が〔示される〕。  
「この般若波羅蜜に住する」等によって  
道の利益が示されている。  
「般若波羅蜜呪」等は (25)

利益を具える陀羅尼を示している。  
「そのように」等は般若波羅蜜を

学ぶようにという教誡である。

「それから世尊は三昧から (26)

起きて」等の経句によって

内容の要約を通して疑問を排除している。

「そのようにおっしゃった」等によって

賛同を通して〔経を〕結んでいる。(27)

さて次に、心得たる現観を説明〔しよう〕<sup>12</sup>。

1. 三智<sup>13</sup>を心相続に具えた所依(現観を行ずる修行者)の説明と

2. 果・道の般若波羅蜜を修習する者の

主に所依となるブドガラを示す。(28)

3. 修習されるべき道の現観を説明する。

4. 進み行くべき道の本体を示す。

5. 後の教誡と6. 賛同と7. 随喜である。

すなわち、内容を七つ〔に分けて〕説明しよう。(29)

【第1】導入によって正しく示されている。

すなわち声聞が寂靜を追求すること等の

〔経〕句と結び付けられると主張しているけれども、

知者はどのようにお喜びになるのか？(30)

【第2】大牟尼が三昧に

入っている等の経句によって

果の般若波羅蜜は仏陀〔を示し〕、

道の般若波羅蜜は仏子(=菩薩)(31)

つまり諸々の聖者の修習対象である。

異生(=凡夫)や小乗の

聖者もまた般若波羅蜜を修習するけれども、

般若波羅蜜を遍く完成することは無いということが示される。(32)

【第3】には八事〔である。すなわち〕

「それから仏陀は」から

「減ることは無い」までは

一切相智性を示している。(33)

「色は空」等によって

智の本体についても明確に示されて、

特に、一切相智性を識別させる特徴(chos)〔が示される〕。

すなわち、「般若波羅蜜を学ぼうと望む」等の(34)

質問と回答は①発心の本体と

「どのように学ぶのか？このように見なさい」

の〔経〕句によって②教誡と

「五蘊は空」によって(35)

③決択分の四支を示す。  
色に四空性<sup>14</sup>を適用することによって  
④〔根源的〕法界そのものの本体と  
不二の自性たる基体の (36)

分類もまた間接的に吐露されている。  
「諸法は空性」等によって  
⑤所縁が明示されており、  
「無相、不生」によって (37)

⑥所期が間接的に示されている。  
「不減、不増」によって  
⑦-⑩四種行<sup>15</sup>の本体も  
明示され、分類が間接的に吐露されている。(38)

以上のように一切相智性を識別させる十種を  
正しく知ることがこれ (=一切相智性) について精通する [ことである]。  
それらの理由についても  
発心の体は [～したいという] 欲である。(39)

特に「般若波羅蜜を学びたい」という  
この発趣心 ('jug sems)<sup>16</sup> より明確なものは何なのか? [何も無い]  
「どのように学ぶのか」という問いを持つ者に  
学び方を教授するのが教誡である。(40)

四加行道<sup>17</sup>の実践もまた  
蘊等を空として修習することについては  
〔以前よりも〕些か明瞭さが生起しているので、  
分別〔による〕修習だけではないにせよ、(41)

法性を直接知覚でまだ悟っておらず、  
能取 ('dzin pa) が僅かにあるので、  
無分別たる直接知覚の道でもない。  
もし、聖者の道であるならば、(42)

「空として見る」と何故お説きになるのか。  
諸々の聖者はどんなものとしても見ないのである。  
もし、聞〔慧〕・思〔慧〕だけであるならば、  
顛倒した知を持つ故に (43)

「正しい」とはお説きにならない。  
それ故、〔四種加行は〕加行道に他ならないのである。  
一切法空性は  
至尊弥勒によって次のように説かれている。(44)

無の空性を知り、  
同様に有の空性と



自性空性を知るならば、  
「空性を知る」と呼ばれる<sup>18</sup>。(45)

遍計所執は世俗としても無い。  
依他起は真実として成立しているものを欠いている  
円成実は二つ（＝遍計所執性と依他起性）を欠いている故に  
一切諸法は空性である。(46)

「色は空」とお説きになっているので、  
色の遍計所執は無いと説示される。  
「空性は色である」により  
色の顕現には〔そのように〕立ち現れたものはないけれども、(47)

色の依他起たる識 (nam rig) が  
色として顕現していることを示しているのである。  
「色とは別に空性〔は無く〕、  
空とは別に色は無い」と (48)

お説きになっているので、法性たる円成実と  
色を捉える主体の識と〔の両者〕が  
同一体とか別異体であることが否定されている。  
色を例示なさってから、(49)

空性として示されたこのことによって、  
諸法と〔根源的〕法界 (chos dbyings) とが同一であると示されているのである。  
基体である五蘊は  
個別に示されているため、別異の法として説示されている故に (50)

〔四種〕行の拠り所となっている。  
〔根源的〕法界より明確なものは何なのか？〔何も無い〕  
「一切諸法は空」によって  
所縁たる一切諸法が示されている。(51)

「無相、不生、  
不滅」によって、順に  
心、証〔得〕、断〔得〕である。  
すなわち、三つの偉大性を明らかになさっている。(52)

四種行は  
過失と功德には自性が無いと悟る（＝証得する）ことにより、  
過失を断じ、功德を成就するために、  
行じ (sgrub pa)、実践するものなのである。(53)

すなわち、「垢が減ることは無い」  
「功德が増すことは無い」によって  
非常に明確な確信が生起するのである。  
そのように、基・道・果という三つの (54)

法一切があらゆる点で  
不生と説明されているので、一切相智性である。  
「色は無い」等によって  
蘊・界・処が残り無く (55)

無いと示されていることによって、見〔道〕・修〔道〕の  
道智の所縁が示されている故に、  
それらの語句によって道智〔が示されている〕。  
「無明は無い」等によって (56)

声聞・独覚と共通の  
現観にして非方便の基智と  
「無明が尽きることは無い」等によって  
善巧方便の基智が示されているのである。(57)

「苦と」等によって  
正等加行（＝一切種の現観の完成に結び付けるもの）の  
修習対象たる形象が明確に示されている。  
それ故に正等加行なのである。(58)

仏子（菩薩）達には得〔るべきもの〕が無い故に  
「〔般若〕母に依り、住する」によって  
修練を堅固にさせる加行が  
非常に明確である故に頂に至った〔ところの〕(59)

加行（頂加行）自身の本体が説明されている。  
〔その説明は〕「心に障り無く、恐怖が無い」という  
徴 (rtags) 〔として現れた〕頂加行である。  
「顛倒」から「究竟」までは (60)

次第加行である。  
これについては、三種の顛倒知<sup>19</sup>  
すなわち顛倒した学処の対治として  
六波羅蜜が示されている。(61)

〔すなわち〕四顛倒見<sup>20</sup>に対する  
対治として「あらゆる事物が無我である」とお説きになっている。  
常を無常として捉えること等〔の、無常を常として捉える〕  
顛倒した邪見の対治については (62)

六隨念<sup>21</sup>が示されている故に  
「顛倒知を超える」によって  
次第加行を識別させる  
十三の性質 (chos)<sup>22</sup>を要約してお説きになっている。(63)

それらは順を追って修練されることを指して、  
次第加行と

説かれている。[そしてそれは]「究竟」によって示されている。  
 「三世の勝者のこの母に (64)

依って、現等覚する」とお説きになっているのが  
 刹那加行  
 である。何故ならば、諸仏は  
 第二刹那に成仏する (65)

道に結び付けるもの (=加行) において徴 (rtags) であるからである。  
 「般若波羅蜜の呪」等は  
 果たる法身の現観である。  
 すなわち、これについて「呪」と言うのは (66)

自身の意 (man) を表相 (mtshan ma) から守って  
 他者を守る (tra) 意味として作られた (=合成語である)。  
 「般若波羅蜜」によって  
 「自性身の」断〔得〕が示されている。(67)

「明」によって証〔得〕〔が示される〕。  
 「無上」によって受用身〔が示される〕。  
 「非等等」は変化身  
 「苦が鎮まる」は御業である。(68)

それから果である法身は  
 不虚なる真実として示されているので  
 「根源的」法界が不虚なる真実として成立しているものであることは  
 この経が極めて明確に示しているのである。(69)

【第四】進むべき道の本体  
 「呪を五つの単位として分けて  
 示す」と言う文殊〔菩薩〕の子息たる  
 タンパサンギェーのお説は<sup>23</sup> (70)

知性ある者はすべからく採用しなさい。  
 「行った」と二度〔言うこと〕(gate gate) によって  
 資糧道と加行道。  
 「彼岸に行った」(pāragate) とは見道である。(71)

何故ならば、輪廻の彼岸に行ったからである。  
 「彼岸に正しく行った」(pārasaṃgate) とは  
 その (=見道の) 流れに連なる修道〔であり〕、  
 「菩提」とは究竟である。(72)

「後の教誡」等の三つ (= 5. 教誡・6. 賛同・7. 随喜) は理解しやすい。  
 諸々の広大な仏母 (=般若経) と用語法 (tshig gi lam) が  
 相応しない故に〔般若心経が〕「八事を  
 示さない」と思っはいけない。(73)

〔般若心経〕は『十万〔頌般若経〕』等の一つひとつ〔の経〕から要約されており、これ（＝般若心経）は他の経と別の時に説かれている故に語句が同じである必要は無いのである。〔仏力〕等は（74）

語句もほとんど一致してもいる。  
全ての始源である廣大般若経（yongs ye yum mdo rgyas pa）も多くの開祖の方々が八事を解説なさっていないので（75）

これ（＝般若心経）にも全く不必要であるけれども、『十万頌〔般若経〕』等では八事を隠義とする枠組み（chings）があるのであって、これ（＝般若心経）に適用することは恣意的にすぎない（76）

ものだと疑ってはならない。  
何故ならば、理由は上で説明したように教証と理証によって証明されているからであり、名称からも理解できるからである。（77）

般若波羅蜜自身の本体だけ示したことによって心〔髓〕となるならば、『善勇猛般若経』<sup>24</sup>等は何故〔心髓では〕ないのか。（78）

テキストが小さいことのみによって〔心髓である〕ならば、『一字〔般若経〕』<sup>25</sup>もどうして〔心髓と〕設定しないのか。それ故に、般若波羅蜜経すべての心髓を集約したものとして設定すべきであるので、（79）

八事の善なる内容を示さないならば、隠義たる現観が無いことになるので、あらゆる〔般若経の〕内容を示すことにどうしてなるのか。般若波羅蜜経には小さいものが多いとしても、（80）

こ〔の経〕だけが般若波羅蜜経の心髓として設定されている〔経〕力（nus pa）及び、一切の賢者が般若波羅蜜経の他の小さいものより、こ〔の経〕だけを（81）

最高のものとして大事になさっている意図の心髓もまた知りなさい。  
声聞と菩薩の分類、蘊・界・処、（82）

二無我、三性  
十六空、縁起、  
四諦全般と〔四諦の〕個別性、  
智、御業等は (83)

廣大般若経や  
大乘阿毘達磨〔経〕<sup>26</sup>等で知ることができる。  
テキストは小さく内容は豊富  
こういうものをありのままに理解できることは稀である。(84)

古の賢者たる知者たちの  
御心の海には善説のこの〔如意〕宝珠が  
おありになるに他ならないけれども、  
文字を通して書かれたものは無い。(85)

それ故に、後世の思い上がっている、  
貢ぎ物や名声を欲しがめるこれらの者が、  
このような善説をどうして知ることができるのか。  
後にこの経を隠義と (86)

結びつける者が出てきたとしたら、  
私や私の〔説に〕従う者〔が説く〕<sup>27</sup>  
私の善説を盗んだと  
知者達はお知りになって下さい。(87)

最近、新たな善説を少しだけ  
目にするとそれに依って、捏造した語句を  
たくさんつくり、善説者たる  
その人に悪口を言い、〔自〕説をアピールする (88)

賢者のふりをした詐欺師が地を覆っている。  
正直な者は僅かしかいない<sup>28</sup>。  
前代未聞の善説を新たに著したならば知者である。  
自分を褒めて他者を貶める人は賢者ではない。(89)

すべての経藏の中の最上の心髄であるこれ(般若心経)を  
詳しく解釈する者は無数にいるけれども、  
善く学んで、修習し、〔その結果として〕御徴 (rtags mtshan) を得たことにより  
著したこの解説が王様である。(90)

以上『聖母般若波羅蜜心経註釈頌』という「般若心経難釈無比」である。すなわち、経の二十五偈によって八事を示し、勝者のあらゆる教説の内容を集約した仕方であるこの註釈の王様は旅する人のターラナータにラブジャンマワ・シャーキャギェツツェン等がお願いして、二十九歳の癸卯年の黒月二十二日に一坐のうちに著した。これによりさらに般若波羅蜜を主とする勝者の所説が〔十方〕すべてに広まりますように。善し!<sup>29</sup>

## 訳 註

1. 般若心経の偈頌の数。
2. 〈 〉は洋装本テキストでの説明語句。テキストに註記はないが、洋装本の元になったテキストの割註と思われる。以下も同じ。
3. 八事とは現観莊嚴論の論述内容の八つの項目。1. 一切相智 (rnam pa thams cad mkhyen pa)、2. 道智 (lam shes)、3. 基智 (gzhi shes)、4. 正等加行 (rnam rdzogs sbyor ba)、5. 頂加行 (rtse mo'i sbyor ba)、6. 次第加行 (mthar gyis pa'i sbyor ba)、7. 刹那加行 (skad cig ma'i sbyor ba)、8. 法身 (chos kyi sku) の八つ。
4. ディグナーガの『八千〔頌般若経〕要頌』については服部 [1961] 参照。
5. 〈進むべき道程〉の広大な行を指す。
6. 11 偈の 1 行目までが般若経に共通の内容。ここから般若心経独自の内容が説かれる。
7. 論述内容 (brjod bya)、目的 (dgos pa)、究極の目的 (dgos pa'i dgos pa)、相互関係 ('brel ba) との四つの項。
8. 一例として、野澤 [1957] pp.342-343 参照。
9. 仏陀の三教説 (sangs rgyas kyi bka' gsum) のこと。仏陀の教説と見なしうる三つの条件で、何れか一つの条件を満たせば仏説と言い得る。1. 仏陀の直説、2. 仏陀による承認を得た教説、3. 仏陀により加持された教説の三つ。
10. 五円満とは、経本文に入る前の導入箇所を示される經典の完全性を示す五つの条件。時円満、処円満、教師円満、会衆円満及び法円満である。
11. 般若心経は舍利弗の質問と観自在菩薩の回答で教えが構成されるが、これら二人の質問と回答は世尊の加持力を受けてなされる。
12. ここから般若心経の隠義である現観の説明。
13. 一切相智 (rnam pa thams cad mkhyen pa)、道智 (lam shes)、基智 (gzhi shes) の三智。
14. 「色即是空 空即是色 色不異空 空不異色」の四句。
15. 1. 被甲行 (go cha'i sgrub pa)、2. 発趣行 ('jug pa'i sgrub pa)、3. 資糧行 (tshogs kyi sgrub pa)、4. 出離行 (nges 'byung sgrub pa) の四つ。真野 [1972] pp.22-26 参照。
16. 発趣心 ('jug sems) は発願心 (smon sems) と対をなす。「般若波羅蜜を学びたい」という場合に発願心は文字通り学びたいと願うことであり、発趣心とはその発願心が実際に学びに適用されている状態の心である。
17. 正等加行 (rnam rdzogs sbyor ba)、頂加行 (rtse mo'i sbyor ba)、次第加行 (mthar gyis pa'i sbyor ba)、刹那加行 (skad cig ma'i sbyor ba) の四種。
18. Verse 34 in chap.XIV: abhāvaśūnyatām jñātvā tathābhāvasya śūnyatām/ prakṛtyā śūnyatām jñātvā śūnyajña itī kathyate//34// MSA.p.94; Tib: med pa'i stong pa nyid shes shing// de bzhin yod pa'i stong nyid dang// rang bzhin stong pa nyid shes pas// stong pa shes pa zhes brjod do// MSA(H).20a2-3
19. 想顛倒、心顛倒、見顛倒の三種顛倒知
20. 常・楽・我・淨の四種顛倒見
21. 仏随念 (sangs rgyas rjes su dran pa)、法随念 (chos rjes su dran pa)、僧随念 (dge 'dun rjes su dran pa)、戒随念 (tshul khirms rjes su dran pa)、捨随念 (gtong ba rjes su dran pa)、天随念 (lha rjes su dran pa) の六つの随念。
22. 十三の性質とは、次第加行において修習する十三の項目。六波羅蜜と六随念 (註 21 参照) 及び一切法無自性 (chos thams cad dngos po med pa'i ngo bo nyid) である。
23. 出典未詳。タンパサンギュー (またはタンパギャーガル) はシャーキャチョクデン (1428-1507) の般若心経註釈書でも言及される。そこではタンパギャーガルの口訣として四空性を月の譬喩により解釈している。(『集成』 p.343、註 13 参照)
24. Rab btsal rnam par gnong pa yis zhus pa'i mdo 『善勇猛所問経』 (H.vol.34, no.14, sna tshogs, ka 1b1-123b1)

25. *yi ge gcig ma* 『一字母』 (H.vol.34, no.22, sna tshogs, ka 252b2-253a1)
26. この部分のテキストは、*shes rab pla rol phyin rgyas dang//they chen mngon pa sogs su shes//* である。前者の *shes rab pha rol phyin rgyas* (廣大般若経) は『十万頌般若経』 (*stong phrag brgya pa*) を指すと思われる。『十万頌般若経』は一般に「大乘阿毘達磨経」 (*theg pa chen po chos mngon pa'i mdo*) と言われるので、後者の *theg chen mngon pa* は『大乘阿毘達磨集論』を指すか？
27. テキストは */bdag gam bdag rjes 'brangs pa'am/* であるが、*pa'am* を *pa'i* に訂正して読む。
28. テキストは */drang po'i rang bzhin skye bo brgya la 'ga'/* である。文字通りには「正直な性質の人は百人中数名」である。
29. テキストは *dge'o//* // テキスト完了の結びの句である。

キーワード：般若心経頌註、ターラナータ、顕説と隠義、現観莊嚴論、前代未聞の善説